幼児期の社会性の発達と保育（その3）
—幼児期の仲間関係と思いやりの発達の関連—

川瀬良美　長谷川和世　鈴木美紀　五條香織　金子保
（橿原大学）　（大隷寺幼稚園）　（橿原大学）

《目的》
本報告は、幼児期の社会性の発達を仲間関係と保育の関連から検討することを目的とした一連の研究の第3報である。第49回大会では第2報として、仲間関係の発達の個人差と生活習慣の自立及び幼児期の行動特性的関連で、親の養育方針の相違から検討した。その結果、多くの子どもたちと一緒に遊ぶ仲間と認知されていた子どもの親は、基本的推移の自立を重要視し、しかも早い時期に達成することを目標としていた。生活習慣の自立した幼児の園生活における余裕は、相互援助的な関係を推進する保育方針の中で他児への援助的な行動を誘発し、多くの仲間関係を発達させる結果のあったのであると考察した。

しかし、援助的行動の発生には、幼児がおこなった状況的要因のみならず個人的要因、例えば共感性あるいは思いやりのような特性が、行動を助ける要因として関与していることを指摘している。思いやりが生じるには、他者への積極的な関心を基礎に、他者のおこなった状況への共感をもたらす感受性、そしていたずらの感情が行動を喚起するのであろう。思いやりの発達には、諸要因が関与しているであろうが、相互援助的な仲間関係の発達を保育方針としてこの人合い、思いやりの行動を誘発する一因となり、幼児期においても比較的安定した個人差を示し、と考えられる。森下（1990）は、幼児の共感性を測定するため、他者への関心、感受性、いたずらの要因から構成された母親を対象とした質問紙を作成している。そこで本研究では、仲間関係の発達と幼児の思いやりについて、森下の質問紙を用いて検討する。

《方法》
1 対象：幼稚園年長児1クラス31名（男児17名、女児14名）、平均年齢5歳7ヶ月（標準偏差3.44）
2 仲間関係調査：個別面接法により、いつも一緒に遊ぶ友たちについて5名まで回答を求めた。
3 共感性調査：森下の共感性的質問紙の20項目について、母親からは家庭での状況について、担当者からは幼稚園での状況について、各々3段階評定によって回答を求めた。

《結果と考察》
(1) 仲間関係調査：被選択数

<table>
<thead>
<tr>
<th>被選択数</th>
<th>全体</th>
<th>男児</th>
<th>女児</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0人</td>
<td>1 (3.2)</td>
<td>1 (5.9)</td>
<td>0 (0.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>2人</td>
<td>5 (16.1)</td>
<td>2 (11.8)</td>
<td>3 (21.4)</td>
</tr>
<tr>
<td>3人</td>
<td>3 (9.7)</td>
<td>2 (11.8)</td>
<td>1 (7.1)</td>
</tr>
<tr>
<td>4人</td>
<td>5 (16.1)</td>
<td>3 (17.6)</td>
<td>2 (14.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>5人</td>
<td>9 (29.1)</td>
<td>7 (41.1)</td>
<td>2 (14.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>6人</td>
<td>5 (16.1)</td>
<td>1 (5.9)</td>
<td>4 (28.6)</td>
</tr>
<tr>
<td>7人</td>
<td>2 (6.5)</td>
<td>0 (0.0)</td>
<td>2 (14.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>8人</td>
<td>1 (3.2)</td>
<td>1 (5.9)</td>
<td>0 (0.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>31 (100)</td>
<td>17 (100)</td>
<td>14 (100)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(2) 共感性調査

共感性の質問項目は、3因子構造である。第1因子は、第49回大会では保育方針の相違から検討したが、寒さの中でも関心を示す子どもたちは、本因子を示すと考えられる。森下（1990）は、幼児の共感性を測定するために、他者への関心、感受性、いたずらの要因から構成された母親を対象とした質問紙を作成している。そこで本研究では、仲間関係の発達と幼児の思いやりについて、森下の質問紙を用いて検討する。

(600)
した結果は、表2の通りである。

3因子のいずれも母親の平均値が高く、「他者への関心」は有意な傾向が、「感性性」と「和らぎ」そして3因子合計の「共感性」は有意差が示された。

次に母親の評定と女子の評定の相関を求めたところ、他者への関心（r=.635 P<.001）、感性性（r=.508 P<.01）、和らぎ（r=.710 P<.001）、共感性（r=.715 P<.001）全てに有意な相関が得られた。これらの結果から、一人一人の子供の共感性は、家庭と幼稚園において比較的一致した傾向で認知されているが、母親の方が有意に高く評価していたと言える。母親の評定は、期待水準が反映されているのかもしれない。

母親と女子の評定の相関が確認でき、しかもここでは幼稚園での評定結果を問題とすることから、以後は女子の評定結果の相関分析する。

表2 母親と女子の平均値とt検定結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>平均値</th>
<th>母親</th>
<th>女子</th>
<th>t値</th>
<th>P値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>他者への関心</td>
<td>2.46</td>
<td>2.38</td>
<td>2.11</td>
<td>.05</td>
</tr>
<tr>
<td>感性性</td>
<td>2.25</td>
<td>2.10</td>
<td>2.11</td>
<td>.05</td>
</tr>
<tr>
<td>和らぎ</td>
<td>2.35</td>
<td>2.21</td>
<td>2.07</td>
<td>.05</td>
</tr>
<tr>
<td>共感性</td>
<td>46.94</td>
<td>44.42</td>
<td>7.07</td>
<td>.01</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（b）共感性の性差

共感性の発達には性差があり、男児の方が高いことが報告されている。そこで性別に検討したところ、表3の通り全ての光源において男児の方が高かったが、有意差が示されたのは、いわゆる因子のみであった。他者の関心に関する、あるいは現実的なことへの感性性において有意差は示さなかったが、男児の方が感性性が高いと感ずるし、小さい子が泣いていると興味をもつ。いわゆる行動は男児が有意に多いことが示された。

表3 男児と女子の平均値とt検定結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>平均値</th>
<th>男児</th>
<th>女子</th>
<th>t値</th>
<th>P値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>他者への関心</td>
<td>2.36</td>
<td>2.39</td>
<td>2.39</td>
<td>.12</td>
</tr>
<tr>
<td>感性性</td>
<td>2.07</td>
<td>2.13</td>
<td>2.11</td>
<td>.05</td>
</tr>
<tr>
<td>共感性</td>
<td>43.35</td>
<td>45.71</td>
<td>2.11</td>
<td>.05</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（3）共感性と共感性の関連

共感性と共感性の関連をみるため、被選択数と共感性的評定に基づいて表4の通りであった。全児では、他者の関心を除いた全てに有意な相関が示され、特に共感性が高い傾向が示された。特筆すべきは、性別の検討において、男児の感性性において有意な相関が示されたことである。女児は全児に共感性が高い傾向であるため有意差は示されなかったと考えられる。

男児の感性性の評定値は、男女を通して全ての要因の中で最も低い値であったことは、この要因の有意な相関に意味があることを示唆している。

表4 被選択数と感性性の相関値

<table>
<thead>
<tr>
<th>被選択数</th>
<th>全体</th>
<th>男児</th>
<th>女児</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>他者への関心</td>
<td>.101</td>
<td>.064</td>
<td>.131</td>
</tr>
<tr>
<td>感性性</td>
<td>.349*</td>
<td>.508*</td>
<td>.207</td>
</tr>
<tr>
<td>和らぎ</td>
<td>.312*</td>
<td>.280</td>
<td>.163</td>
</tr>
<tr>
<td>共感性</td>
<td>.315*</td>
<td>.377</td>
<td>.199</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* P<.05

（4）共感性と共感性の関連

共感性の発達には性差があり、女児の方が高いことが報告されている。そこで性別に検討したところ、表5の通り全ての光源において女児の方が高かったが、有意差が示されたのは、いわゆる因子のみであった。他者の関心に関する、あるいは現実的なことへの感性性において有意差は示さなかったが、男児の方が感性性が高いと感ずるし、小さい子が泣いていると興味をもつ。いわゆる行動は男児が有意に多いことが示された。

表5 標準回帰係数とF値

<table>
<thead>
<tr>
<th>目的変数</th>
<th>感性性（選択数）</th>
<th>P値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>他者への関心</td>
<td>.101</td>
<td>.30</td>
</tr>
<tr>
<td>感性性</td>
<td>.349*</td>
<td>.04</td>
</tr>
<tr>
<td>和らぎ</td>
<td>.312*</td>
<td>.02</td>
</tr>
<tr>
<td>共感性</td>
<td>.315*</td>
<td>.01</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* P<.05

（5）結論

母親と女子の評定の相関が高かったことから、共感性は家庭においても幼稚園という社会的場面においても比較的同様の傾向を示す個人の特性とみることができる。共感性の発達における性差は、本研究でも、全児において女児が高いという先行研究と同様の結果が示され、いわゆる行動は、女児が有意に高かった。

共感性の発達には、幼稚園の相互援助的な共感性関係を推進する保育方針を背景に、共感性が関連していかがそのような関係が示されたのであろうか。他者への関心を除いた全てに有意な相関が示されたことから、女児の感性性が高い傾向であるため有意差は示されなかったと考えられる。

男児の感性性の評定値は、男女を通して全ての要因の中で最も低い値であったことは、この要因の有意な相関に意味があることを示唆している。

引用文献